

PHD LETTER

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

PHD LETTER
Volume
148
2021.12

公益財団法人 PHD協会
2021 年度会報 148号



40年、あなたが支え、 つくってきたPHD運動



1981-2021

40周年記念事業のご報告

～「感謝」と「ありきたりの日常の尊さ」を込めて～

事務局長 坂西卓郎

2021年11月27日、岩村先生の召天日にPHD協会の40周年記念式典を開催させていただきました。残念ながらコロナ禍のためオンラインでの式典となりましたが、元研修生も世界各国から参加してくれ、約300名の方がご参加くださいました。この場を借りて皆様にお礼を申し上げます。

40周年記念式典に私たちが込めたメッセージは「感謝」と「ありきたりの日常の尊さ」でした。

「感謝」

PHD運動はあなたとわたし、一人ひとりが参加してつくっていくものです。事務局が皆さんに「感謝」を申し上げるのは違うかも知れません。しかし、岩村先生が提唱された活動が40年間続いてこられたこと、その中で多くの方が育成されてきました。私ももちろんその一人です。それは皆さん一人ひとりのお支えがなければ成しえなかった偉業です。その事実を思うと「感謝」という言葉以外出てきませんでした。PHD協会に関わって下さった一人ひとりに感謝を伝えたいと思います。ありがとうございます。

「ありきたりの日常の尊さ」

次に込めたメッセージは「ありきたりの日常の尊さ」です。PHD協会は何を大切に大事にしていたのか、何を守りたいのか。その一つの答えです。研修生達が紡ぎ出す「日常」、そこには多くの智慧や工夫、積み重ねがあります。そして平和と健康の源泉があります。そのことへの尊敬、共感が、PHD協会の土台であり、私たちをつなぐものではないでしょうか。

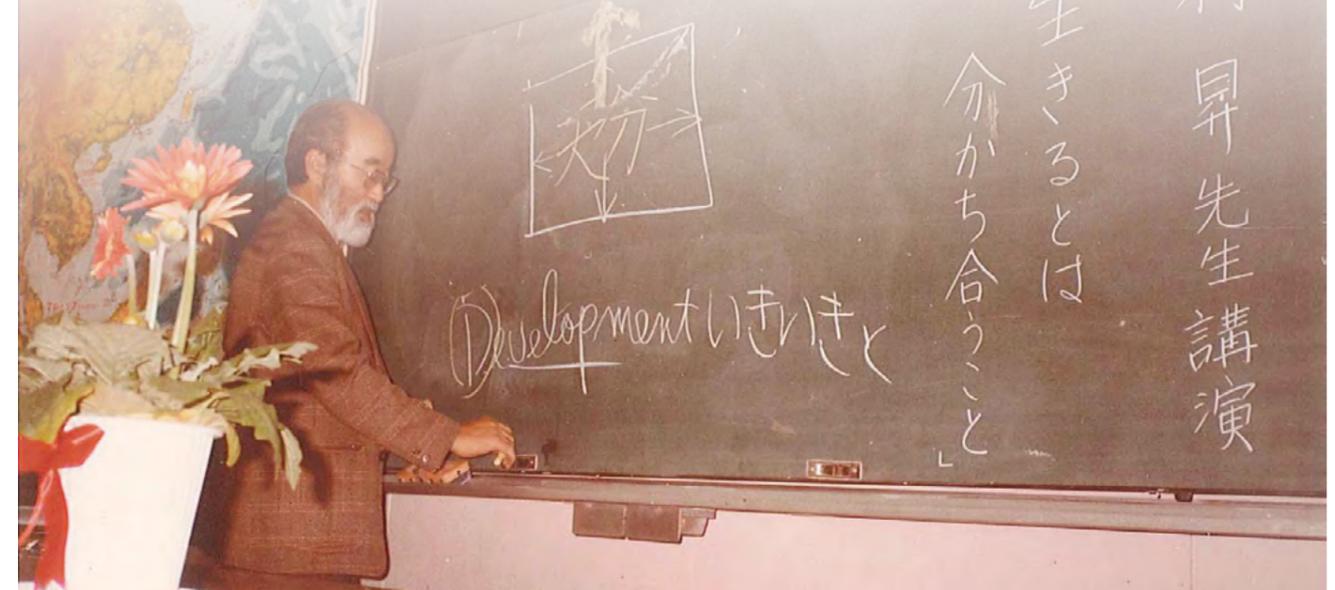
しかしながら、ミャンマーで、そして世界中でそういった日常が紡げない現状があります。今まで積み重ねてきた努力が一夜にして無にされてしまいました。そのことの苦痛、憤りを思うと心が張り裂けそうです。今ここに誓います。PHD協会はミャンマーに日常に戻るその日まで共に歩み続けたいと思います。

原点に立ち返る

40周年を迎えるにあたって、岩村先生が「PHD創刊号」（1981年6月）に書かれた「PHD運動とPHDボランティア」に立ち返りたいと思います。PHD運動の根幹がここにあります。



40周年を迎えるにあたり、PHD運動の原点である岩村先生のメッセージを振り返りたい。40年前の文章であるが、今なお私たちに本質を問いかけるものだ。



PHD運動とPHDボランティア

(出典：1981年6月 PHD創刊号)

岩村昇

私は、1962年以来、今日に至る迄、初め10年間はネパールに住み着き、続いて8年間はネパールからアジア、アフリカ、中南米を巡り、昨年からは日本とアジアを往復する生活を続けて居ますが、いつも発展途上国の草の根の人達の中に備えられている生活の智慧に教えられ、創意工夫の能力に励まされ、優しい心に慰められてまいりました。

ところが、こんな素晴らしい可能性を秘めた草の根の人達が、次第に疲弊しつつあり、しかも我々の今日の快適な生活と、草の根の人達の貧しさが無関係ではないということがわかって来たのです。世界というよりも宇宙船地球号、人類というよりもその乗組員仲間の75%を占める草の根の人達は、発展途上国の農漁村及び都会の下町更にスラムに住んで居り、その又75%は「家族の中で誰かが1週間以上病みつくと、何かを売らなければその治療費の出所がない」というボーダーライン及びそれ以下の生活に陥ってしまっていますが、近年その数が益々増えつつあるのは憂慮に堪えない事があります。

今や経済はとっくに国境を越え、そうした国際経済によって国際政治も揺れ動いております。その国際経済、国際政治の波をかぶる度に、発展途上国の草の根の人達は、一層貧しく病み疲れて行って居ります。

ところが一方、我々の身の周りはどうでしょう。我々は一体、今の物質的に豊かな生活を、このままでいいと思って居るのでしょうか？我々の身近にも色々な問題が起きて居ります。

経済も政治も、欲望の力学で動いて居ります。我々が、着たい、見たい、食べたいという欲望追及だけを毎日の生活の目的とするとなると、発展途上国の草の根の人達に、いつまでも貧しく病んで居ってもらった方が都合がいいという事になります。なぜならば、いつまでもそのような低い生活水準で、より安い労働力で、そのマージンで快適な生活をつづけて行く為には都合がいいという事になります。そんな事は同じ宇宙船地球号の乗組員として許されません。

一方我々の身の周りで起きて居る問題は、みな欲望追及の経済と政治の力学だけに身をまかせていた結果ではないでしょうか？我々は自分の為にも、生き方を変えなければならないところ迄来てしまいました。今我々が見たい、着たい、食べたいという欲望を、せめて10%でもがまんするという別の力学を働かせ、経済と政治とは違った波を国際化しなければ、発展途上国の草の根の人達も立ち上がれないし、我々自身も救われません。「このままでは、宇宙船地球号のほんの一部にだけ富と力が偏在し、そこでは富と力の故の問題が次第に重さを増し、一方では、宇宙船地球号の75%を占める発展途上国の草の根の人達の貧しさがどん底に陥りつつあり、この草の根の人達の中に折角の秘められてあった可能性が涸れ果てかねない。放置すれば、彼らの愛する宇宙船地球号は破滅である」。私は最近アジアと

P (なかよく) H (すこやか) D (いきいき)

運動

日本をジェット機で往復する度に、危機感を一層深くして居ります。

先ず自分の身につけた 10% を捧げよう！！この恵まれた健康の 10% を健康を失った人々の為に、富の 10% を今日食べる物もない人々の為に、知識と技術の 10% を「自分で健康を作り、生活をたて直そう」と努力して居る草の根の人達の為に！！先ず健康づくりの為には、どうすればよいでしょうか。

今日、草の根の人達の命をむしばんでいるのは、寄生虫症、コレラ、赤痢、腸チフス、結核、癩、ジフテリア、百日咳、破傷風、はしか、ポリオ等、実は医者も居なくても病院がなくても彼等の生活の現場で予防でき、早期発見、早期治療できるものばかりであります。それにも拘らず、必要な知識と、必要な技術と、必要な resources (資源) が、それらを必要として居る草の根の人達の生活の現場にないばかりに、かからなくてもいい病気にかかり、死ななくてもいい病気で死んでいって居るのであります。

そこで自分たちの生命を自分達で守り、自分達の健康を自分でつくっていくに必要な知識と技術と資源を、草の根の生活現場に届けなければなりません。簡単な問題まで Community (地域共同体) の外の病院、医師とつなぐ事は、却って他者依存の気持ちと機構を草の根に広げる事になり、折角草の根に秘められた可能性を涸らしてしまう事となります。草の根の人達は自分達で問題を解決する事のできる可能性を、一人一人の中にも、Sharing each other - お互いに分かち合う (おすそわけ) - という Community dynamics (共同体の働き) の中にも秘めて居ります。住民が自分達で力を併せてやった方が、外来者がやるよりも余程効果が上がるし、住民自身の励みにもなって自分たちの能力を更に開発することができます。

そこで「Hospital based (病院に基盤を置く) から People centered (住民中心) へ。又 Curative service oriented (包括医療保健) 更に住民の能力開発を志向した Human development (人間開発) と貧困追放を目指した Economic development (経済開発) を含めた Development oriented (開発本位) へ」力点が変わらなくてはならないのです。

次に生活のたて直しを考えてみましょう。

やはり草の根の人達の中に秘められた可能性を信頼して、彼等の生活の現場に必要な知識と技術と resources (資源) を届ける事があります。「小さな力でも持ち寄れば、こんなに暮らしをよくする事ができるんだ」という経験程、草の根の人達を力づけるものはありません。

最後に世の人が They are ignorant という無知に対しては、私たちは何をすればよいでしょう。

草の根の人達は、決して無知蒙昧 - ignorant, unlightened - ではありません。それどころか、秘められた可能性と蓄積された生活の知恵があります。只、疾病と貧困の鎖から自らを解放放つために、必要な知識と技術と resources (資源) が生活の現場に届いていなかったという意味で、無知だっただけであります。それが手に入り、自分達で使いこなせるようになれば、草の根の人達は自らを開発する事ができるのです。

扱、健康づくり (Health development) の為にも生活立て直しのためにも更に自己開発 (Self development) の為にもコミュニティに持って入る技術は Simple (簡単) で、Practical (実地的) で、Economical (安上り) で、and Duplicable (何時でも何処でも誰にもできる)、略して SPED の原則にかなった Appropriate technology and knowledge (適正技術と知識) でなくてはならず Applicable (技術的に適用でき)、Affordable (財政的に維持でき)、Available (資材が入手でき) and Acceptable (住民に受け入れられる) という 4A 原則をふまえてなくてはなりません。

今我々にできる事は、それぞれ自分の専門の分野で、時間と知恵と知識と技能の 10% を捧げて、この SPED と 4 A principles (原則) に立った Appropriate technology and knowledge (適正技術と知識) を develop (開発) して草の根の人達の development (開発) の為に備える事があります。

次に富の 10% を捧げて基金を作りましょう。この基金は PHD 基金と呼ばれます。そして PHD ボランティアをつくりましょう。

このボランティアは Peace (平和)、Health (健康)、and Human Developmentalist (開発し) で選ばれた若者が貴方と

私が献げて作った基金によって訓練され、先ず草の根の人達の中に入り、Peace and Health Village Development (平和で健康な村づくり) の為の Motivator (推進役) として働く若き Voluntario の中に起きた自己改革の実例を見て確信をもって言えます。

‘10%を捧げる事は自分を救う事である !!’

PHD Voluntario 候補の若者は、訓練・教育の任期を終えて帰って来ると、それぞれ自分の生活の現場、家庭、職場、学校で Peace and Health Motivation (平和と健康推進) の為に 10% の時間と知恵と知識と技能と富を献げて働く Voluntario となり少なくとも 3 年間役割を果たします。ここまでやって来た PHD

Voluntario に初めて公認の PHD Voluntario という称号を与えます。

私とあなたは、自分の身の周りから一人の若者を選んで、彼が PHD ボランティアとしてやりぬくまで、自分の 10% を捧げて Supervision with love (愛を以てする監督) をその若者に集中しましょう。

そして私は確信します。「貴方も私も、自分の時間と知恵と知識と技能とそして富の 10% を捧げる事によって自分自身も新たなことになる」ことを。かくして自己改革を日常生活の中でできる事からはじめることによるのみ世界は平和になるのであります。

最後に PHD 運動の根幹ともなる一つの詩をご紹介します。

——草の根——

簡素な暮らしの中で
喜び悲しみを分かち合い
新たな自分の発見につとめ
優しい心をつちかい
暮らしの中に知恵の一つをてがかりに
自分でできるところから
地に平和と健康の輪を拡げていく

すばらしい先達のもとでは
一つの目標が達成されたとき
みんなは「おれたちで、こんなに、できたぞ」と歓喜する
この誇りと自信が世界をかける





PHD運動提唱者・岩村昇ベターハーフ/岩村史子さん

PHD協会40周年記念の年を迎えられました事を、心からの驚きと感謝とまた41年42年43年への歩みが続くことを思い、感慨深いものが込み上げて参ります。

高齢のため式典に伺うことが出来なく申し訳なく思いますが、心から「おめでとうございます！」を送ります。今ペンを走らせています傍らに立派な40周年記念誌と昭和56年6月（1981年）創刊号を開きつつ書いています。創刊号冊子の中に「PHD感謝函」のラベルが入っていました。

今日も仲良くPeace、すこやかにHealth、いきいきとDevelopment、この創設の時から運動指針が40年引き継がれてきている事、ひとえに事務局の方々の指導、研修生への心配りとプログラム作り。研修生たちの意気込み、努力は勿論。そして1番私の心を打つことは研修生を受け入れて下さるホームステイ先のご家族の皆様のこと。

最後の研修報告会で話を何度も聞くのですが、生活、宗教の異なる若者たちへのお心遣いを研修生の口から聞く時、時折涙が出ることがありました。自国への帰国後、彼たち彼女たちにとってどんなに大きな支え、思い出となっていることでしょうか。40年、人に例えれば壮年期ですね。PHD運動の基礎が出来上がり、途上国とのつながりの網が太くしっかりした姿を夫昇は満面の嬉しい顔で眺めていると思います。

発展途上国の事をいつも心にかけ、そして草の根の人々をこよなく愛した昇にかわりまして心からの「おめでとうございます」を申し上げたく思います。今は亡き今井鎮雄先生、草地賢一先生からもきっと届いていると思います。

沢山の感謝と祈りを込めて。

草地とし子さん（元総主事・草地賢一さんのお連れ合い様）

PHD協会設立40周年おめでとうございます。

20周年を迎える約1年前、2000年に天に召されて21年がすぎました。

PHDが40周年を迎えられる事、天国で喜んでいる事と思います。

Living is Sharing生きる事は分かち合うこと、弱者と共にというこのPHDの活動が40年もの長い間この神戸で続けてこられた事、本当にうれしく誇りに思っています。

アジアの草の根の研修生を、日本へと迎えて、様々な分野の専門の方々の所で、ホームステイをし、学びを深め、一年間学んだ知識と技術を、現地へ持ち帰り、地域のリーダーとしてその地で生かしていくという方法を続けるという、その地道な活動が原動力となり、今日に至っておられる事、すばらしいです。

又、この一年半以上にも及ぶコロナ禍の中で、通常の海外からの研修生を迎え入れる事のできない中、様々な模索をされて、ミャンマー支援のシェアハウス「みんなのいえ」立ち上げという新しい活動を立ち上げられ、弱く困っている人々の側に立つ活動を続けられている事、すばらしく思い、ずっと支援していきたいと願っています。

今後も50年、100年と地に足をつけた活動が守られますよう心から祈りつつ、お祝いのメッセージとさせていただきます。

川那辺裕子さん（1981年からの事務所ボランティア）

初めから関わらせていただいて、今までこちらに賛同したのは、やはり岩村先生が提唱なさった「共に生きる」ということを、それが非常に私の頭にありまして、それでずっと関わっていきなと思って、生きている限り関わらせてもらいますのでよろしく願います。

藤野達也さん（元総主事代行）

PHDに関わった皆さんが、そこで得た刺激を自分の生活や自分の生き方のなかにどう活かしていくのか、というところに最終的には行き着くと思います。

基本は、「誰かのため」というより、「自分はどうなるんだ」というところに行き着くわけなので、その途中に「誰かのお手伝いをする・誰かの笑顔が見たい」ということがあるにしても、「見たいのは誰？自分でしょう？」という事になってきます。そのために自分は何をしたらそんな風に自分は満足できるのかを考えた時に、色んな方向や色んなやり方、生き方や仕事の選び方、時間の過ごし方や人との接し方というのがあるなかで、そこを皆さんが考える、そういうことを提供できるPHDになったら、まだしばらく続くということがあってもいいのかなという風に思います。

長崎理恵さん（インドネシア語ボランティア）

40周年おめでとうございます。少しずつ形を変えながら、特に今はコロナなのでシェアハウスだったりとか食糧を配るとか、その時その時に困っている人たち、弱い立場の人たちに何を提供できるかということを考えて進んでおられるのが素晴らしいと思います。これからも応援したいです。

神戸新聞様より、5回連続の特集記事を掲載、また式典当日にも取材いただきました。



2021/11/28



2021/11/26



2021/11/27



2021/11/30



2021/12/1



2021/12/2



式典終了後、オンラインにて、元研修生（5か国から43名）と、これまでご支援・ご協力いただいたみなさまとともに交流会を開催しました。元職員や通訳ボランティアの方々に進行・通訳をお願いし、それぞれ懐かしい顔同士、交流しました。

大同窓会

元研修生 5か国から 43名が参加

【フィリピン】



ロナルドさん（2005年度/23期）

フィリピンルームの進行役は納堂邦弘さん（元職員・現評議員）にお願いし、グループタイタイ（運営協力委員）のお二人や日本語ボランティアの方も参加。日本語や英語、フィリピンの言葉を交えて交流を行いました。

岩村史子さんとマヤさんはご自宅からの参加！



10年振りに藤野さんが登場！



【ミャンマー】

ムームーさん（1993年度/11期）トゥントゥンさん（1994年度/12期）スウェウィンさん（2002年度/20期）ゾーウィンさん（2004年度/22期）ススさん（2006年度/24期）ザーナウンさん（2009年度/27期）サンティダさん（2015年度/33期）ティダさん（2007年度/25期）テーさん（2005年度/23期）モーママさん（2013年度/31期）マーチョさん（2016年度/34期）タンタンミエさん（2017年度/35期）モーモーさん（2018年度/36期）ゼンゼンさん（2019年度/37期）

ミャンマーの元研修生たちは、小グループに分かれて、パソコンやスマートフォンから参加しました。久しぶりの再会に安堵の声とともに、笑顔が溢れました。ミャンマールームの進行役の古本妃留美さん（元職員）より、「愛と感謝の詰まった素敵な40周年でした。」

【タイ】

ワラヤさん（1988年度/6期）ポーティさん（1999年度/17期）ノパドンさん（2000年度/18期）ナロンテッサン（2001年度/19期）スラチさん（2001年度/19期）ポーディーヤさん（2006年度/24期）

Zoomでの大同窓会にうまく入れず参加できなかった元研修生もいましたが、それぞれ離れた地域に暮らす元研修生たちが顔を合わせ、再会を喜び、各地域の状況について話すことができました。タイルーム進行役で元職員の松尾（旧姓：小松）みちさんは「時空を超えて、あの人がこの人。ワクワクした！」と。



【インドネシア】

インドネシアの元研修生たちは、当日午前中に大型バスで貸し切りのレストラン会場へ。インドネシアルームの進行は通訳ボランティアの長崎理恵さんをお願いしました。



【ネパール】

バラトさん（1982年度/1期）パッサンさん（2011年度/29期）ラメシュさん（2011年度/29期）ランマヤさん（2012年度/30期）カンチさん（2015年度/33期）ウルミラさん（2010年度/28期）サピナさん（2018年度/36期）スシラさん（2019年度/37期）アシカさん（次期）



©YusukeFuruya

PHD第一期研修生バラトさんが立ち上げた現地NGO「SSS」に、元研修生が集まり、SSSのスタッフとともに参加しました。ネパール語と日本語で交流しました。ネパールルームの進行は今里拓哉さん（元職員）と、通訳は井上理子さん（元職員）をお願いしました。



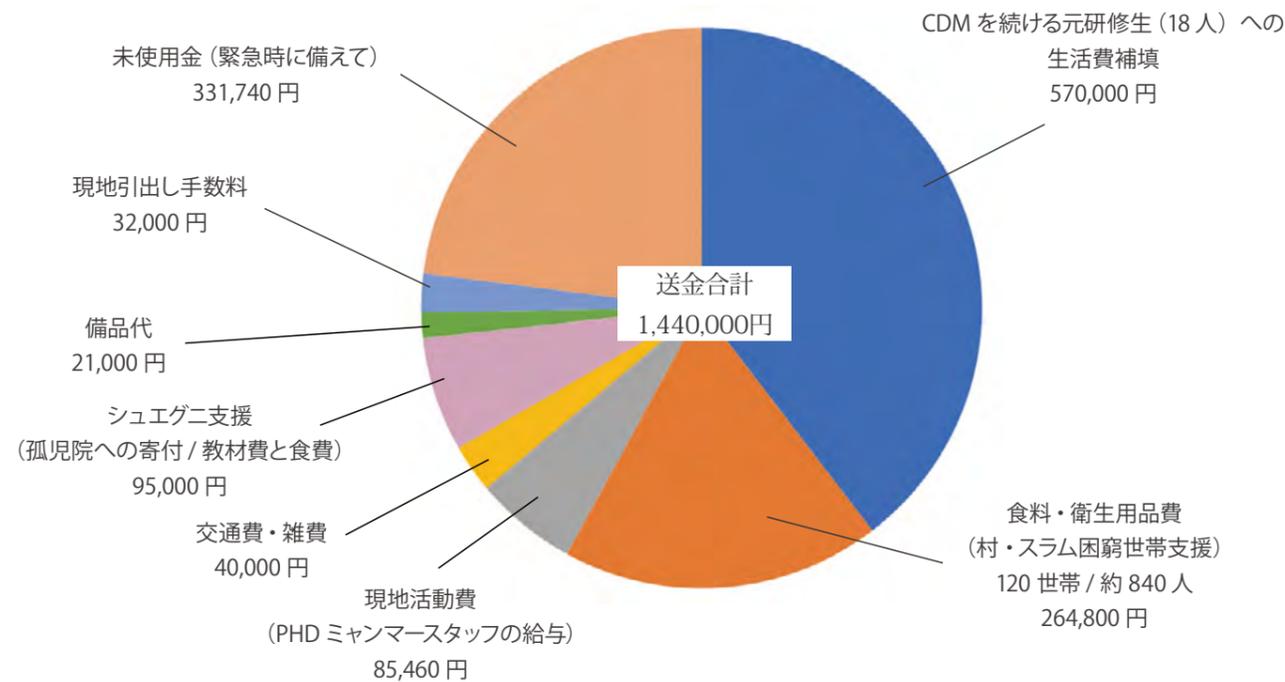
アフナールさん（1988年度/6期）ハスマヤニさん（1992年度/10期）ダスウィルさん（1999年度/12期）アルウィさん（2001年度/19期）エリさん（2003年度/21期）マスラルさん（2005年度/23期）ロザさん（2009年度/27期）エリザさん（2011年度/29期）ダリスマンさん（2013年度/31期）デフィさん（2017年度/35期）レニさん（2018年度/36期）プットリさん（2019年度/37期）

With Myanmar基金「寄り添いの想いをカタチに」

山本 健太郎 =文

クーデター以降、皆さまからのご支援を賜りいただき、民主化を目指す元研修生や村の人達に寄り添うためのミャンマー基金を2021年3月に設立することができました。いただいたご寄付は、下記の通り、CDM（不服従運動）を続ける元研修生の生活費補填、食料・衛生用品費（村・スラム困窮世帯支援のため）、PHD ミャンマーの活動費、シュエグニ孤児院への支援寄付をはじめ、現地ニーズや状況に応じて今も活用させていただいております。皆さまの温かいお気持ち、元研修生たちの日々を生き抜く原動力になっております。本当に心から感謝申し上げます。ミャンマー情勢は今も混沌としています、私たちはこの基金を続けることで、彼らの闘う背中を守り続けたいと思います。

ミャンマー基金使途（2021年12月13日現在）



食料支援を受けた村の人たちからの声



村での衛生用品配付の様子

「クーデターとコロナで今日の生活も見えなかったです。そんなときに食べ物をいただき、助かりました。本当に嬉しかったです。皆さんに感謝しています。」

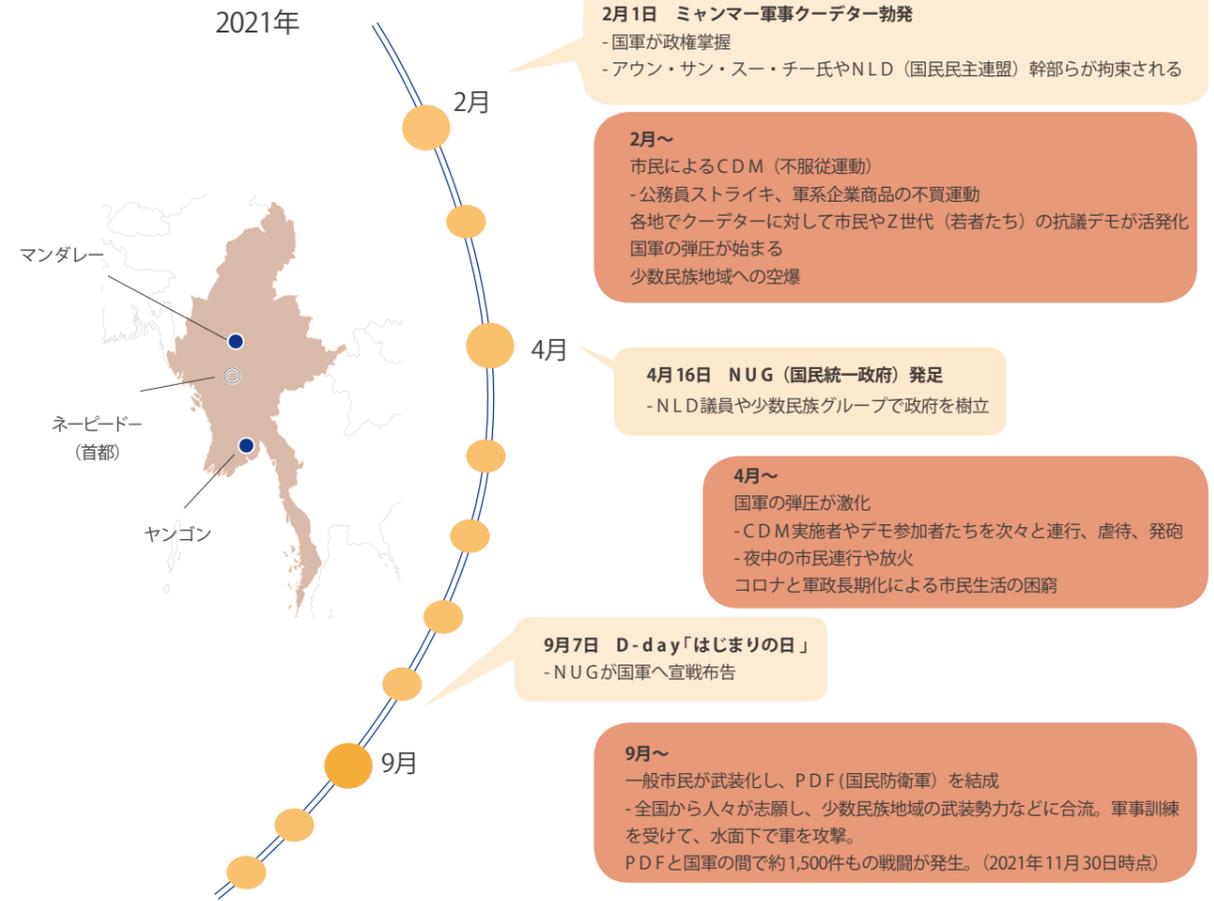
「日本の皆さんの支援をもらって、勇気ももらいました。ミャンマーが大変なときに助けてくれて、ありがとうございました。」



スラムでの食料配給の様子

PHDクーデター以降のミャンマー

山本 健太郎 =文



2021年2月1日の国軍によるクーデターから間もなく1年が経とうとしています。

日本では、本件に関する報道が減少傾向ですが、決して状況が好転しているわけではありません。今もなお、現地ミャンマーでは軍による弾圧が続き、罪なき市民たちは虐げられています。クーデター以降、CDM（不服従運動）や抗議デモに参加した人々は、軍に捕えられて暴行、虐待を受けたり、最悪の場合は殺されることもありました。死者は1,300人を超えました。春以降は、夜間連行や家屋の放火、少数民族地域での空爆も増え、人々の安全安心な日常は脅かされてきました。

そんな中迎えた9月7日。民主派のNUG（国民統一政府）がD-day「はじまりの日」を宣言し、国軍に対して防衛のための闘いを開始しました。※PHD協会としては、武力に頼ることは賛同できませんが、ミャンマーの現実としてお伝えします。

軍と市民の溝は深まるばかりで、内戦状態に突入しつつあるミャンマー。人々の生活には常に身の危険がはらみ、元研修生たちも決死の思いで日々を耐え忍んでいます。軍によるネット接続・情報規制がある中、彼ら彼女らと何とかコミュニケーションを続けています。元研修生たちの大切な“声”を届けながら、私たちに今できることをここに綴ります。



YangonDesignより
Artist:SP



シュエグニ孤児院にて食事提供の様子

シュエグニ孤児院にて、食事の準備をする元研修生のモーママさん、サンティダさん



PHD With MYANMAR

元研修生たちからの声

「皆さん、お元気ですか？クーデターが起きてから、もうすぐ1年になります。本当のデモクラシー（民主主義）になるまで、あとどれくらいかかるのか。分かりません。

今までの闘いの中で多くの人が亡くなりました。私たち国民があげた命、ですよね。亡くなった人たちのことを思うと悔しいし、悲しいです。私たちの番はいつか、とよく考えたりします。もし未来でデモクラシーになっても、もう国民は誰も残っていないんじゃないか、とか。今、私たち（市民）には何もできません。前みたいにデモ活動をする、軍がやってきて刑務所に入れられます。でも、何もしないと、デモクラシーはもっともっと遠ざかります。そう考えたら、辛いです。これは終わりが見えない闘いだから。

今は内戦が始まりました。いつ自分の身に危険が迫るかわからないから、いつでも逃げられるよう荷物をまとめて準備しています。

PHDの皆さんからいただいたサポート、本当に感謝しています。ミャンマーの問題、長く時間がかかっていますが、皆さんサポートと応援を続けてほしいです。どうかストップすることなく、諦めることなく。よろしくお願いします。

今、ミャンマーの人々には、軍反対のデモや SNS 発信



はできません。でも、日本から、世界からはそれができます。それが、私たちの頑張る力、諦めない力になります。皆さんの心や気持ちを行動に移してくれたら、私たちは嬉しいです。それはモノやお金の支援じゃなくても、なんでもいいです。

今のミャンマーには何でも助かります。

どうか、少しずついいので、ミャンマーの状況を知って、伝えてください。皆さんの家族、親戚、友人、同僚、若い世代、すぐ隣の誰かに。もし、諦めそうになったら、ミャンマーの人たちの状況を思い浮かべて下さい。

それが皆さんの行動する力、続ける力になる、と信じています。皆さん、どうかミャンマーのことを諦めないでください。宜しくお願いします。」

PHD ミャンマーへの支援活動

PHD 協会では、様々な「行動」を通じて、ミャンマーへの連帯を示していきます。抗議デモ、スポーツや文化イベントの参加、ニュース記事の共有や発信をはじめ、ミャンマーへの関心を持ち続けければ、私たちに日頃からできることはたしかにあります。

上記の元研修生たちからのメッセージにもある通り、「ミャンマーの事を諦めずに、応援していく。」その姿勢を持ち続けたいと思います。どうかミャンマーへの変わらぬご支援、ご協力を今後とも宜しくお願い致します。

ミャンマー・カレン民族衣装で SNS 発信

企画：国内研修生 1.0 田村華奈



カレンの衣装を着て、長田の街で撮影

ミャンマーサッカー大会@神戸ポートアイランド



国内研修生 2.0 のロンさん、ナンミミさんはそれぞれチームを作ってエントリーしました

PH国内研修生 2.0 の研修状況 (5月～11月末)

2021 年度初の試みとなった国内研修生 2.0 制度。国内在住のミャンマー出身の 2 人が研修生として参加してくれました。コロナ感染拡大もあり、研修は人との接触を極力避ける形で行いました。

【国内研修生 2.0/ ナンミミさん (ミャンマー)】

日本語学校で勉強しながら、PHD 研修生としてもお菓子作りを勉強しています。お菓子を作る時は楽しくて、自分が作った物ができたら、それを他の人に食べてもらうのはとても楽しいです。お菓子作りを学ぶ理由は、私の民族であるカレン、特に難民の人々にいつか教えるためです。このチャンスを頂いた PHD に感謝の気持ちでいっぱいです。ミャンマーに帰るときに、学んだことを伝えたいと考えています。これからもよろしくお願いします。



レシピ本を見て、製菓用語の確認をする
(製菓内容：揚げドーナツ、パイ生地など)



ケーキの焼き上がり、確認方法を教わる
(製菓内容：ブラウニー、クレープ、パン)

【国内研修生 2.0/ ロンさん (ミャンマー)】

日本語学校で勉強しながら、PHD 研修生として YMCA でサッカー指導を勉強しています。研修は楽しくて、いろいろな知識をもらいました。サッカーの事だけではなく、子どもとコミュニケーションを取る機会をもらいました。YMCA のコーチにはたくさん助けていただきました。研修で得た経験をいつか、カレン難民の人々や子どもたちに伝えたいです。これからもよろしくお願いします。



サッカー指導をおこなう

【サッカー指導研修】

研修先

神戸 YMCA ウェルネスセンター 学園都市
研修指導者 ディレクター 増田史弥さん

【ビデオ編集研修】

研修指導者 アルサラン ナシフさん



指導者の増田さん (左) と

【製菓研修】

訪問・見学先

クレープ・デ・フレヴァー (新長田)
カフェラルシュ (元町)
ヒステリックジャム (元町)
ワークセンターわかまつ (新長田)

研修指導者

国内研修生 1.0/ 松浦あおいさん
PHD 協会職員/ 中島麻さん

【国内研修生 1.0/ 松浦さん】

来日して、お菓子作りは初めてのチャレンジだったナンミミさん。「湯煎」「粗熱」などの製菓用語には、自身でビルマ語での説明も加えていました。また「ミャンマーで好まれる味」に近づけるために何度も試行錯誤。勉強熱心なナンミミさんの姿が伝わります。レシピの説明をしながらの実践で苦戦した部分もありましたが、難しい日本語をどのように伝えたら分かりやすいのか、私自身も学ぶ機会となりました。

【国内研修生 1.0/ 成田さん】

ロンさんの研修への取り組み方を見て、日々忙しいにも関わらず、真摯に取り組んでいる姿がとても印象的でした。研修同行した際も、子どもたちと一緒に楽しそうにサッカーをしている様子を見て、自分自身も、学生時代にこういった体験をしておけば良かったなと改めて思いました。みんなにも、「ロンリーダー!!!」ととても懐かれていて、見ていて微笑ましかったです。この経験がロンさんの未来へ生かされることを願います。

REPORT



居住支援法人として困窮外国人に寄り添う

国際協力・交流シェアハウス「みんなのいえ」
施設長 濱 宏子 =文

○ 手探りで始まった居住支援

国際協力・交流シェアハウス「みんなのいえ」が開設し1年以上が過ぎた。経験も知識もゼロからのスタート。手探りだった1年の中で寄せられた住宅困窮者の相談を一部ご紹介したい。

PHD 協会が2021年3月に取得した居住支援法人とは「住宅確保要配慮者に対する賃貸住宅の供給の促進に関する法律に基づき住宅確保要配慮者の入居相談や見守り等の支援を行う者として県から指定された法人」である。

PHD 協会には「みんなのいえ」開設以降、日々困窮外国人からの相談が寄せられている。今夜の寝場所を探す者、食事にさえ困窮する者、住所を求める者、職を求める者、彼らの困窮度は様々であるが、彼らが私たちの知らない所で日本を支えてくれる働き手である事には違いなく、だがその彼ら/彼女らが日本の厳しい現実に直面し水面下で喘いでいるのは決して見逃せない。

2021年11月現在、「みんなのいえ」に暮らす外国人は5名。ミャンマー人3名とベトナム人2名である。「みんなのいえ」は長期滞在の場所ではない。入居時に各々ゴールを設定し、できる限り早く安定した収入と家を確認し、次のステップに進んでもらうための仮の住まいである。部屋が決まり契約書を交わすとの入居者もほっとした表情になるのが嬉しい。



みんなが集まるリビング

ケース① Nguyen Duc Hoang さん

ホアンさんはベトナムの中部地方出身の22歳。来日して3年。家主から急に家賃を値上げされ今夜の宿がなく突然PHDにSOSを送って来た。経済問題や保証人問題、たくさんの事情を抱えている。工場や介護のアルバイトをしながら住居を転々としてきた。出会った時の所持金はわずか1,000円。「PHDで断られたら行くところがない」と語るホアンさん。入居してから落ち着いて就職活動に本腰を入れ、先日介護施設への就職が決まり、「みんなのいえ」から笑顔で旅立った。



新しい職場へと旅立つホアンさん



ナンミミさん、夕食の準備中



フードバンク（個人・企業からの寄贈）

ケース② Aung Chan Myae さん

マイさんはミャンマー出身の18歳。生活の質を上げるべく、ミャンマーにはないチャンスを探して来日。駅から遠く不便なアパートは家賃が高く生活が苦しかった。1番の目標は一人で自分を育ててくれた母親に楽をさせてあげる事、そしていつかはミャンマーで飼い主のいない野犬のためにシェルターを作りたいという夢もある。「みんなのいえ」に入居し、午前は日本語学校、午後は介護のアルバイトをしながら未来への道を模索する。お年寄りに接するのは大好きだと語るマイさん、まぎれもなく彼のような外国人の若者が日本を支えている。



進路相談中のマイさん



アジアの調味料が並ぶキッチン

○ 私たちがこれから考えたいこと

コンビニで私たちが食べているサンドイッチや弁当、私たちの生活に欠かせない携帯電話の組み立て、みんな外国人が夜を徹して安い賃金で働いた産物である。日本にはホアンさんやマイさんのような外国人が何万人もいる。日々の暖かい寝床や温かい食事に困る者も多い。彼らが何とか次のステップに踏み出せるように居住支援法人として住居の面から支えていく。縁あって暮らす日本を好きになってほしい、働いた対価を十分に得てほしい、そして心身共に健康な暮らしをしてほしいと願いながら。

草の根サロン

国内研修生 1.0 佐藤里紗 =文



開催目的

「在留外国人」：日本人や日本で暮らす人々との交流を深め、日本で生活をより良くしてもらう。

「日本人」：国際交流や国際協力に関わるきっかけの場となる。

「PHD 協会」：PHD の活動を知ってもらう。

国内研修生 2.0 であるナンミミさんの製菓研修の発表の場となる。

2021年8月26日に草の根サロンを開催いたしました。コロナ禍で大変な時期ではありましたが、たくさんの方にご参加いただきました。この草の根サロンは、私が4月から国内研修生として活動させて頂く中で、在留外国人と日本人が交流できる場が必要ではないかと思い、企画・開催に至りました。コロナ禍で人と人の交流ができない時だからこそ、この草の根サロンを開催し、参加者の方々に楽しい時間を過ごして頂きたいと準備を進めてきました。

当日はインドネシア、中国、ベトナム、日本の方々に参加していただき、それぞれ趣味や日々の生活の話など、さまざまな話をして盛り上がりました。また、ナンミミさんの製菓研修の成果発表の場として、クレープとブラウニーを提供し、参加者の方からは美味しいと大変好評でした。ご参加いただいた方々に楽しい時間を過ごしていただけたら幸いです。

今回、草の根サロンの開催にあたり多くの方々にご協力をいただきました。ありがとうございます。今後もこのように在留外国人と日本人が気軽に交流できる場を継続的に設けることができると思っております。

PHD News

◇ 2022年度 研修生再招聘に向けて

研修担当 山本 健太郎

長引くコロナ禍や感染対策の影響で、2021年度も研修生招聘を断念せざるを得ませんでした。しかし、2022年度はぜひとも研修生招聘再開を目指したいと考えております。会報146号(3月発行)でもお伝えしましたが、再招聘へのハードルとしては、1) 出入国規制の緩和 2) 招聘受入を歓迎できる状況かが重要と考えております。

1) については、日本と研修生各国の出入国制限が解かれればクリアです。11月8日以降、国境はオープンしていましたが、昨今のオミクロン株により、日本政府は11月30日に外国人の新規入国を停止しました。2) については、研修生と受入側の私たち双方の安全がある程度確保される必要があります。幸いPCRやワクチンの普及、治療薬開発が進むなど、医療体制が整いつつあるのは救いです。

1) と2) を総合的に判断し、来日後の感染対策を十分に考慮しながら、研修生招聘・研修事業再開への第一歩を踏み出したいと考えています。次期研修生たちも、現地で約2年もの間、来日を心待ちにしています。しかしながら、ミャンマーに関しては、軍事クーデターの影響で、はっきりした招聘の道筋は見えておりません。実現に向けて努力しておりますが、国の現状を見ながら慎重に手続きを進めたいと考えております。

従来の研修のように、数多くの研修やホームステイを実施するわけにはいきませんが、人との「出会い」から学ぶ草の根交流の視点は大切にしたいです。支援者の皆さまのお知恵をお借りしながら、ウィズコロナの新研修スタイルを開拓したいと思っております。今後とも何卒宜しくお願い致します。

◇ みんなで生きるために〈復刻版〉発刊

—ありがとう、岩村昇先生。

あなたの教えは私たちの心の中で生き続ける—
ネパールで結核から3万人の命を救った岩村昇博士の名著を復刻。鳥取大学医学部からネパールに渡り、様々な感染症や困難から現地の人々を救った岩村昇博士の感動の実話。ベジャワールに派遣された中村哲医師に多大な影響を与え、アジアのノーベル賞と呼ばれるマグサイサイ賞を受賞した日本の国際協力活動の原点・岩村昇博士から今改めて学ぶ。無私無欲の人間愛の尊さを伝える不朽の名作。



*この書籍は、「日本ネパール人づくり協力会」が制作しました。全国の書店から注文できます。

〈復刻版では新たに以下の資料と寄稿を収録〉

- ・資料編 / 岩村 昇 - 略歴、表彰歴、著書・関連図書
 - ・特別寄稿 / 日本キリスト教海外医療協会(JOCS) 会長・畑野研太郎、日本ネパール人づくり協力会会長・廣江 研、岩村昇夫人・岩村史子
- ※この本は1965年に出版された書籍を復刻したものです。
(特定非営利活動法人日本ネパール人づくり協力会設立40周年記念事業)

40周年の舞台裏

○月×日のPHD協会

中島 周年事業で広報担当は超々大忙し。今まで人に頼むことを躊躇してきたが、そんなことは言ってもらえない。が、結局、頼むより自分でやった方がいい？

中村 本番、オンライン上での大同窓会部屋分け担当。操作ミスで時間をかけた設定が吹っ飛ぶ。弘法も筆の誤り？。それでも楽しんでくれた皆さんに感謝。

山本 40周年記念メッセージ収録に奔走。寺田さん、神吉さん、佐倉さん、、、それぞれの心に元研修生の存在があり感動。40年受け継がれる絆が動画に。ぜひご視聴を。

坂西 前任の藤野さんと約10年振りに再会。曰く「卒業(退職)するのは感受性の高い人から」。私はまだ10年、藤野さんの30年までにできるか、卒業。

濱 インドネシア元研修生の団結力に脱帽。記念ソング熱唱、記念ケーキ入刀から周年風船まで用意。極めつけはお揃いのバッジ作成。動画は下記から。

あみだ順。

◇ 40周年の動画はYoutube「草の根」チャンネルへ

40周年のメッセージ動画は、PHD協会の公式Youtubeチャンネル「草の根」にてご覧ください。11月27日のオンライン式典についても、近日中に改めて配信を予定しております。

Youtubeチャンネル
「草の根」



https://www.youtube.com/channel/UCsm7179m0mm_3HPUqbfWw0w

